

京都大学工学部 正員 工博 吉川 和 広

1. まえがき

最近、一般土木工事の工程計画に関して、時間的な側面に重点をおいたPERT手法が広く用いられるようになってきた。PERTの概念に加えて、プロジェクト費用を最小にするようなスケジュールを求めるのがCPMであり、今後の発展が期待されている。

2 CPMの定式化

CPMの手えられたネットワークPは、 $n+1$ 個の結合点 $(0, 1, 2, \dots, n)$ 、 m 個の作業をもつものとする。Pに属する作業 (ij) に対して、結合点時刻 t_i 、費用勾配 C_{ij} 、標準作業時間 D_{ij} 、特免作業時間 d_{ij} が与えられているとき、作業 (ij) のスケジュールにおける所要時間を x_{ij} とすると、CPMの問題は、

$$1. x_{ij} + t_i - t_j \leq 0, (ij) \in P \quad 2. d_{ij} \leq x_{ij} \leq D_{ij} < \infty, (ij) \in P \quad 3. -t_0 + t_n \leq \lambda \quad (1)$$

式(1)の制限条件のもとで

$$U(\lambda) = \max_{x_{ij}} \sum_{(ij) \in P} C_{ij} x_{ij} \quad (2)$$

を求めることになる。すなわちCPMの問題は、 λ をパラミターとするパラメトリックプログラミングの問題として定式化される。

3 CPMの一般解法

ネットワークPのアーチをつぎのよう分類する。

$$Q_1 = \{(ij) | x_{ij} + t_i - t_j \leq 0, (ij) \in P\}, Q_2 = \{(ij) | x_{ij} = D_{ij} > d_{ij}, (ij) \in P\}, Q_3 = \{(ij) | x_{ij} = D_{ij} = d_{ij}, (ij) \in P\}, Q_4 = \{(ij) | x_{ij} = d_{ij} < D_{ij}, (ij) \in P\} \quad (3)$$

x_{ij} のベクトルを x 、 t_i, t_j のベクトルを t とし、 $Z = \{x, t\}$ をデレーション λ に対する最適許容解とすると、デレーション $\lambda = \lambda_0$ に対する最適許容解 $Z^* = \{x^*, t^*\}$ は、

$$x_{ij}^* = x_{ij} - \theta C_{ij}, (ij) \in P \quad t_i^* = t_i - \theta \delta_i, 0 \leq i \leq n \quad (4)$$

として求めることができる。式(4)の θ_j, δ_i はつぎの制限双対問題をとくことにより求められる。

$$\left. \begin{array}{ll} \text{制限条件} & 1. f_{ij} = \sigma_{ij} + \delta_i - \delta_j \geq 0, (ij) \in Q_1 \quad 2. \sigma_{ij} \geq 0, (ij) \in Q_1 \cap Q_2 \\ & 3. \sigma_{ij} = 0, (ij) \in P \cap (Q_1 - Q_2) \quad 4. \sigma_{ij} \leq 0, (ij) \in Q_1 \cap Q_4 \\ & 5. \delta_0 = 0 \quad \delta_n = 1 \end{array} \right\} \quad (5)$$

$$\text{目的関数} \quad \min \left\{ \sum_{(ij) \in P} C_{ij} \sigma_{ij} \right\} \quad (6)$$

また式(4)の θ ($0 \leq \theta \leq \theta_0$) は次式により計算することかできる。

$$\left. \begin{array}{l} \theta_0 = \min [\theta_1, \theta_2, \theta_3] \\ \theta_1 = \begin{cases} \min [(x_{ij} + t_i - t_j) / f_{ij}] & f_{ij} < 0 \\ +\infty, \text{すべての}(ij) \in P \text{ に対して } f_{ij} \geq 0 \text{ の場合} \end{cases} \\ \theta_2 = \begin{cases} \min [(x_{ij} - D_{ij}) / \sigma_{ij}] & \sigma_{ij} < 0 \\ +\infty, \text{すべての}(ij) \in P \text{ に対して } \sigma_{ij} \geq 0 \text{ の場合} \end{cases} \\ \theta_3 = \begin{cases} \min [(x_{ij} - d_{ij}) / \sigma_{ij}] & \sigma_{ij} > 0 \\ +\infty, \text{すべての}(ij) \in P \text{ に対して } \sigma_{ij} \leq 0 \text{ の場合} \end{cases} \end{array} \right\} \quad (7)$$

4 CPMとプライマルデュアル法

CPMの問題を式(4)を用いてとく場合、計算が複雑なため、あまり実用的とはいえない。一般にはCPMの問題はプライマルデュアル法によりフロー問題に転化してとくのが便利である。

式(1), (2)をベクトルと行列を用いてあらわすと双対問題となり、

$$D(\lambda): \quad \sum_j A_j x_j \leq C' + \lambda d', \quad \sum_j b_j x_j \rightarrow \text{Max.} \quad (8)$$

つぎに行列 A の j 番目の列ベクトルを Q_j とおく。よって式 (8) の主問題は

$$P(\lambda): \quad A x = b, \quad x \geq 0, \quad (C' + \lambda d') x \rightarrow \text{Min.} \quad (9)$$

B をレージョン λ に対するベースマトリックス, C_e, d_e を C, d のエレメント e のなかから B に対応するエレメントを選んで構成される列ベクトルとすると, $D(\lambda)$ の最適解は双対定理により,

$$z' = (C_e + \lambda d_e) B^{-1} b \quad (10)$$

インデックスの集合を

$$S = \{j \mid z' Q_j = C_j + \lambda d_j, 1 \leq j \leq n\}$$

とすると, シンプレックス基準

$$z' Q_j = [C_e + \lambda d_e] B^{-1} C_j < C_j + \lambda d_j \quad (11)$$

が成立する j の値はかわらない。よって式 (8), (9) の制限双対問題および制限主問題は,

$$RD(\lambda): \quad \delta Q_j \geq d_j, \quad j \in S, \quad \delta' b \rightarrow \text{Min.} \quad (12)$$

$$RP(\lambda): \quad \sum_{j \in S} x_j Q_j = b, \quad x_j \geq 0, \quad \sum_{j \in S} d_j x_j \rightarrow \text{Max.} \quad (13)$$

$$\text{となり, } z^* = z' - \lambda - \theta \text{ のときの } D(\lambda) \text{ の最適解とすれば, } z^* = z' - \theta \delta \quad (14)$$

$$\text{となる。式 (14) に対する } P(\lambda) \text{ の最適解は, } x^* = B^{-1} b \quad (15)$$

$$\text{となる。式 (14) を } D(\lambda) \text{ の目的関数に代入すると, } (z' - \theta \delta) b = [C_e + (\lambda - \theta) d_e] B^{-1} b \quad (16)$$

$$\text{式 (15) を } P(\lambda) \text{ の目的関数に代入すると, } [C_e + (\lambda - \theta) d'] x = [C_e + (\lambda - \theta) d_e] B^{-1} b \quad (17)$$

となり, 双対問題により式 (14) は λ のときの $D(\lambda)$ の最適解となる。従って GPM の問題は式 (5), (6) の制限双対問題をとくことのかわりに制限主問題をといても同じであるということが明らかになった。

5 フロー問題による CPM の解法

式 (5), (6) に対する 制限主問題は,

$$\text{制限条件} \quad \left. \begin{array}{l} 1. \sum_{(ij) \in P} f_{ij} - \sum_{(jk) \in P} f_{jk} = 0, \quad (1 \leq j \leq n-1) \\ 2. 0 \leq f_{ij} \leq C_{ij}, \quad (ij) \in Q_1 \cap Q_2, (e(ij)=0, e(j2)>0) \\ 3. 0 \leq f_{ij} = C_{ij}, \quad (ij) \in Q_1 - (Q_1 \cup Q_2), (e(ij)<0, e(j2)=0) \\ 4. f_{ij} \geq C_{ij}, \quad (ij) \in Q_1 \cap Q_2, (e(ij)<0, e(j2)=0) \\ 5. f_{ij} = 0, \quad (ij) \in P - Q_1, (e(ij)>0) \end{array} \right\} \quad (18)$$

$$\text{目的関数} \quad \sum_{(ij) \in P} f_{ij} \quad (19)$$

を最大にするようなフロー $\{f_{ij}\}$ を求めることとなる。ここに

$$e(ij1) = t_j - (t_i + D_{ij}), \quad e(ij2) = t_j - (t_i + d_{ij}) \quad (20)$$

この最大フロー問題はラベル法によりもとめることができる。ラベル法過程が終了したときの $\{f_{ij}\}$ はフロー条件をみたし, ラベルのついた結合点の集合を I , つかなかつた結合点の集合を J とすると, I, J によって与えられるアーグの集合,

$$Q_5 = \{(ij) \mid i \in I, j \in J, (ij) \in Q_1\} \quad Q_6 = \{(ij) \mid i \in J, j \in I, (ij) \in Q_1\} \quad (21)$$

はカットをつくり, そのカット値と流量は等しくなる。そして $\lambda^* = \lambda - \theta$ に対する最適許容解 $\{x^*, t^*\}$ は

$$\left. \begin{array}{l} 1. x_{ij}^* = x_{ij} - \xi, \quad i \in I, j \in I, e(ij) \leq 0, e(j2) > 0 \\ 2. x_{ij}^* = x_{ij} + \xi, \quad i \in J, i \in I, e(ij) < 0, e(j2) \geq 0 \\ 3. x_{ij}^* = x_{ij} \quad \text{その他の場合} \\ 1. t_i^* = t_i, \quad i \in I \\ 2. t_i^* = t_i - \xi, \quad i \in J \end{array} \right\} \quad (22)$$

$$\text{ここに, } \xi_1 = \min(\xi_1, \xi_2), \quad \xi_1 = \min_{(ij) \in Q_5} [e(ij)], \quad \xi_2 = \min_{(ij) \in Q_6} [-e(ij)] \quad (k=1, 2) \quad (23)$$

$$\text{となり, プロジェクト費用の増加量は} \quad \Delta P = \xi \times \sum_{(ij) \in P} f_{ij} \quad (24)$$

として計算することができる。